

京都府農林水産ビジョン（仮称）検討委員会（第7回）議事要旨

1 日 時

令和元年 11 月 7 日（木） 10：00～12：00

2 場 所

ホテルルビノ京都堀川 2階 「加茂の間」

3 概 要

●開会あいさつ

昨年9月の第1回目の委員会開催から早いもので今回7回目となり、最終案を御議論いただく。これまでの委員会では京都らしさや推進体制が必要等、様々な御意見をいただいた。委員会としては最後の開催となるが、これまでの御意見全体、パブリックコメントの対応、推進体制について御議論いただきたい。

PRについては、副部長をトップとして、農林水産部の若手職員を中心とした検討チームを作り、PRの方法や府民参画の仕組みについて検討を進めている。

最後の委員会なるので、全7回の委員会全体を通した御意見もいただき、修正の上、12月の府議会で報告させていただきたい。

●第6回委員会でいただいた御意見と対応方針について

子ども達へのアプローチは、非常に重要だと思う。高校生が次の進路を考える場合、農林水産業を選ぶという道筋が非常に乏しく、進路としての農林水産業が失われてしまっているのではないかと思う。意欲的に書き込んでいただいていると思うが、イベントだけではなく、高校の教員への認知度向上も必要。職業系高校だけではなく一般の高校生に対しても、農林水産業へ就職するような道筋をつくるのが人材育成につながるのではないか。

一般の高校生に対してPRするというのは、非常に重要な視点だと考えており、市町村との意見交換会でも、小・中学校で農林水産業がどういうものか、首長さんを筆頭に学校を訪問し、情報交換を行っていると同っており、そういった取組も含めて広くPRすることが伝わるよう表現を工夫したい。

きょうと食いく先生等で幼稚園や保育園でサツマイモの栽培や、田んぼを借りて米を作って餅つきをすること等は非常に大切。ある小学校では、3年生の時に近所の茶農家を招いて綾部の特産品の茶を学び、5年生で近隣の米農家から米のことを学ぶ。子ども達への食育については充実しつつあると思う。先ほどの御意見にもあった中学生、高校

生への働きかけは、お小遣いをもらって、自ら選択して食べ始める時期であり非常に重要である。

最近では、農業を職業として選ぶことができなくなっており、農業科のある高校の生徒が就農することが少なくなっている。これは、生徒へのアプローチが少ないことも要因であるが、農家だから土日がない、農家だから朝早くから日が沈むまで働かなければならないという、農家側（雇う側）の問題もある。農家であっても有給があり、土日祝日が休め、農繁期に休日出勤すればその分は振替で休めるなど雇う側に対してもしっかり教育していかないと、農業が更に衰退していくことになる。

子どもへのアプローチと同時に、雇う側の教育について考えていくことが、今後更に必要になるのではないかと思う。

その視点は非常に重要だと認識しており、働き方改革が進められている中で農林水産業全ての分野で話をいただいているところ。農林水産業の魅力ある現場に携わっていただくためには雇う側の改革も必要なことだと考えている。本文の中でも、働き方改革について記載しており、今後施策としてしっかりと進めていきたい。

具体的に本文に記載することではないが、推進体制について、能動的な部分があれば良い。例えば、飲食店や小売店等に対して、売り込むだけではなく、一緒になって京都府の農産物を使用したものをPRできれば良いのではないか。また、ビジョンの趣旨に沿って、生産したものを使用している店をマークで表示してサポートするとか、特典があると良いのではないか。

イベントについては、農林漁業者が行うイベントを支援するだけではなく、一緒に企画するのはどうか。子どもが体験するだけではなく、子どもが企画に参加したりするなど主役としての楽しさを味わうなどしてはどうか。例えば、私は朝市を子どもと一緒に企画して、どうやったら売れるかを一緒に考える取組を行っている。

人生の中に農業（ビジネス）をおもしろいと思ってもらえるような部分があり、その中で農業の役割や社会的意義、楽しさを伝えていければ良いと思う。

府民も巻き込み、一緒に参加型で、取り組んでいこうとするビジョンなので、府民参画は柱として、しっかりと考えている。

この後、推進体制についても御議論いただくので、本文に書き込める部分があるかしっかりと検討していきたい。

●推進体制について

推進体制を積極的に動かしていくためには、全体の責任者（リーダー）が必要であり、チームで行うべきだと思う。企画のスタートアップを行う、次々新しいことを開発して

いくチームが必要ではないか。

また、府民を巻き込んでいくための交流の場、オープンな場があって、そこにお世話役がいて、起業の場だとか、都市の人とか、一般の主婦とか子どもとか関心のある人が集まって色々な交流ができるような、オリエンテーションの場を年に2回ぐらい作ってはどうか。農林水産ビジョンの未来について、発表の場があって、そこでマッチングを行う人が動かしていくという絵が見えれば、新しいことが起きるのではないか。

プレゼンテーションは府が行うのか、それとも府民が行うのか。

形を決めない方が良い。それぞれの立場で企業や子ども達が集まってしたいこと、できることを発表して交流できる方が良い。

「交流の場」がキーワードだと思う。色々な人と顔を合わせられ、交流できる場所があれば新しいことが生まれる可能性があると思う。

農林水産ビジョンの上位計画として、京都府総合計画があり、「一人一人の夢や希望がすべての地域で実現できる」が基本的な考え方である。ビジョンでは農林水産業の発展と地域の活性化を両輪として、更に一歩進んで地域づくりや村づくりにも力を入れている。国も移住だけではなく関係人口として都会の住民が農山漁村に関わることを施策に掲げている。

府としても様々な人に支援できる体制を作っていかなければならない。現時点の推進体制の案では、副部長をトップとして、各課長、振興局等と一緒に進めていきたいと考えている。先ほどの開会挨拶でも少し触れたが、若手職員が中心となって検討を進めているところであり、直接、ビジョン本文に記載するのではなく、今後、ビジョンを推進していく中で具体的に計画していきたい。

方向性としては発言のとおりで、具体的には今後計画される。スタートアップの障壁が一番大きいので、何とか引き上げるようなサポートができれば良いと思う。

待っているだけでは人は来ないし、窓口を府庁で全て担うのは相談者との距離がまだ遠いように思う。若手職員のチームで考えているとのことだが、大学との連携であれば、課題を示した上で、研究プロジェクトを行うなど、もう半歩、積極的な仕掛けが入ってくると良いと思う。

たたき台として記載させていただいているが、外に出て行ってPRし、ニーズ等を色々な方々と話をする中で収集しながら、当面動かしていくというイメージ。その後、必要に応じて地域機関に窓口を置くことなども検討していきたい。

大学との連携について、生産等の技術面は、試験研究機関で対応できると考えているが、農山漁村や地域の活性化の分野は府では対応できていないので、シンクタンク機能を設置して大学の先生方に御協力いただくようなことを考えており、予算も検討したい。

大きな予算は不要であり、学生も交えて地域の方に話を聞くなど、働き掛けがあると連携がうまく進むのではないかと。

小売りの立場から話をすると、物を売ってお金を稼がないと続かないと思っている。メディア機能について、自分たちのやっていることだけをPRすると読み取れるが、食文化を担っている小売りや飲食店等へのPRも頑張るといふ旨も記載してほしい。

消費する立場の人と関わることが多い中、その人たちに訴えかけていくことが私の仕事だと思っている。

生産・流通・消費は一体のものだと考えており、本文に記載している部分もあるが、再度、全体を見直したい。PR部分についても行政だけが勝手な思い込みでPRすることはなく、専門家の御意見をいただくなど、消費者向けのPRを考える場を設定する必要があるため、一緒になって消費者のための振興に取り組んでまいりたい。

少し違う視点として、これらを府民の方などに打ち出す際、それぞれ個別に話をするのではなく、「新たに推進体制ができる」というような大きなキャッチフレーズがあることが全体を動かす上で重要だと思う。

新しく変わるというワクワク感が伝わることで、このビジョンが皆に受け入れられるかどうかの重要なところではないかと思う。そのためには巻き込むことが必要で、例えば、京都の農山漁村には、芸術家の方が多く移り住んでおられるので、そういった方に参加してもらって、高い視点から意見を伺ってみてはどうか。

個々の施策を別々に行わず、象徴的な新しいものが出てくれば、興味が集中してくる。司令塔のような組織があれば良い。

ロゴの作成などPRについて、しっかり行っていくよう御意見をいただいているところであり、若手チームで検討している最中である。今後いただいた視点もしっかり考慮していきたい。

推進体制としてどこがコアになり、司令塔になると考えているのか。

私が全体の中心になってやっていくこととしており、PRするに当たって、必要な方がいれば、参画していただくなど、一緒に行っていくような体制も考えている。また、専門家に多数入っていただいて、議論するような場も必要ではないかと考えている。

●パブリックコメントの結果について

「半農半X」は思想を表す言葉であり、兼業農家との違いも明確でない中で、ビジョン本文で使用する必要があるのか。支援の対象を広げすぎると、本当に支援が必要な農家の方々への支援が疎かになってしまうのではないかと考えている。

農業に携わる手法として考えており、人生100年時代にあって、今まで農業に関わってこなかった方々に携わってもらうということで定年帰農等を一般名称として使用している。一度、国等の使用状況も検証したい。

ビジョン本文を要約したパンフレットは作成するのか。

PRのためにも必要であり、作成しようと考えている。

タイトルの仮称はいつとれるのか。

府内部の手続きを経て仮称をとりたいと考えており、PRのためのキャッチフレーズ等も今後検討していきたい。

また、イラストも現在作成中であり、本文の挿絵もイラストと同じ絵を使うなどして本文が読みやすくなるよう工夫していきたい。

●これまでの検討委員会を通して

非常に勉強になる期間だった。自分の立場で何ができるか考え、やっていかなければならないと思っている。

文字はあまり読んでもらえないので、パンフレットや動画は期待している。大人と子どもで興味を引くことは違うと思うので、例えばネットに公開する場合は色々なパターンがあったほうが良いと思う。キャッチフレーズと挿絵は大切に、ネットで検索する際、文字が多くて読む気がなくなり、グラフしか見ないということもある。キャッチフレーズがあって、色がついていて何が言いたいかわかるものであれば、見たくなると思う。

農産物も含め、京都産というものに対する京都府民の強いプライドを感じている。外国人も含めて京都の外から来る人の京都ブランドへの憧れも感じる。うまく生産者のモチベーションアップにつなげていただき、打ち出してほしいと思うし、自分も委員会で勉強してきたことを生かし、小売店の立場から取り組んでいきたい。

米農家は儲からず、新規就農者でも米作りをしたい人への推進は難しいと言われており、特に設備投資の面でかなり難しいと感じている。私は就農して13年目で1億円ほど投資をしている。それぐらい投資をしていかないと規模拡大ができないし、規模拡大ができないと利益を得られない。利益が得られないと設備投資ができないというように悪循環になる。設備投資をすると規模拡大しないと、回収できないので、借金がなくなった頃にはまた新しい借金が必要になる。そういった中、戦略的に農業を推進していこうとするビジョン作成の一端に関わったことは勉強になった。

自分の年より若い人が新規就農されることは中々ないが、今年の4月から、若い人が入ってきて楽しく仕事をしてくれているように見える。目的を持って張り切っており、こういう子たちが増え、雇用できる農業法人が増えれば、もう一度京都府の農業が伸びていくと思うし、そういう経営体になるために府や市と連携していきたい。

ビジョンの作成を通じて、農林水産業・農山漁村の京都らしさが大きなテーマだったと思う。伝統、文化、歴史、そしてブランドに対する誇り、価値観等、こういったものをいかに結び付けながら現実の回答を出していくかというのが基本的なテーマだったと感じた。

市町村も2,000年代に合併し、農山漁村も過疎高齢化を乗り越え、限界集落化が起こっており、これまで担ってきた機能が果たせなくなった。また、市町村も農協も土地改良区も同様である。

個人の価値観が重要等、時代が変革している中で、府の役割も変わってきている。例えば、攻めの姿勢をもっと打ち出さなければいけなくなってきたし、それ以外の組織や個人が担ってきた役割の肩代わりも必要になってきているのではないかと思う。

府の組織や仕事のやり方も変わらざるを得ないのではないか。推進体制が重要になってくる。今回は機能として記載し、現状の組織を前提にしているが、今後組織の在り方も考えて欲しい。

日本社会が20年で激変する中でこのビジョンは重要だと考えている。どう生きていくかを決めるかぐらいのことで、これは日本だけの問題ではない。社会を構築する上でも重要である。

人口が50年後には明治時代の水準に戻ると言われており、一方で都心に人口が集中していく中で、このビジョンは農山漁村がどうやって生活していくのかの試金石になる重要なものと感じている。最終的には人がいなくなり、そういった中で農山漁村に人に住んでもらうためには、その魅力づくり、ライフスタイルをどのように提案するかがビジョンで重要な部分になると思う。

人が集まればアイデアも出てくるので、人が集まることが非常に大切。行政はやり

方が決まったものに支援しがちだが、もっと柔軟な支援を行ってほしい。

京都はイノベーションを起こしやすい土地柄なので、どんどん活躍できる場づくりを行ってほしい。

交流の場は、このビジョンで育てていただきたい。京都らしさの見える化や具体化が必要である。

一番期待し、未来を作っていくのは地域の自然と共生する中での農林水産業で、儲かれば生活できないにもかかわらず、現在の経済からすると立ち遅れているように見えるが、地球環境を守るためには必要だと思う。

大量生産・大量消費も改善していかなければならない。たくさん食べることが豊かというイメージになっているが、今はエネルギー摂取量が多すぎる。品質の良い農産物をゆっくりと食べることを進めるなど、皆で考えて、京都方式が未来の幸せだと言われるようにしたい。

借金ベースの農林水産業からの脱却も京都府から発信してほしいし、そういったことが起こる交流の場を育ててほしい。

本年の4月からこのビジョンに関わらせていただき、これだけ熱心に京都府のために御議論いただき、感謝している。

本文の記載について、文章が稚拙な部分や十分に反映できていない部分もあると思うが、検討委員会など話を聞く場は大切だと考えており、今後も色々な場を作りたいと考えている。今後ビジョンをPDCAサイクルで進行管理していくに当たっても、外部の意見を伺いたいと考えており、4年後の見直しも同様である。今後もお付き合いいただければありがたい。

●まとめ

現実の京都府の農林水産業と農山漁村、あるべき京都の将来像を眺みながら実行可能な計画書を作成、編纂された事務局の皆様の御尽力に対して敬意を表する。

棚卸的な検討も行い、課題も明らかになってきた。関係者、府民に共有し、携わってもらうことが重要だと思うし、それができて初めて力に変わる。その努力をお願いしたい。

計画全般に言えることだが、でき上がりが始まりである。計画書も成長していくものだと思っており、実際に地域計画がうまく進んでいるところは、計画そのものが成長している。KPI や進捗状況等、PDCAサイクルをしっかりと回して育ててほしい。